

の切れっ端を絡み合わせ「た。造り続 輪は名刺代わりに持参する も一点物だ。普段は飾っ 知恵の輪を解くのは脳 ヒモが棒より短いので、

電力設計部

日立製作所に入ってから19年間に所属したのが日立工場電力設計部だ。電力会社向けの発電機などをつくるのが仕事で、挑戦しがいがあり、ロマ

書 歴 履 の 私

隆 村 川

13

ンを感じる職場だった。そこで私たち技術者がどんなことに取り組んでいるのか、一般の読者にもイメージしてもらえよう、電気工学の初歩を少し説明したい。

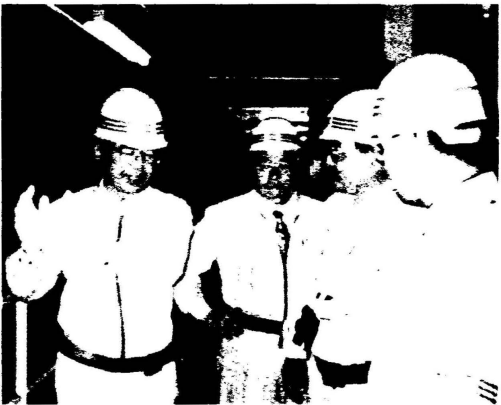
私たちが毎日使っている電気は「交流」と呼ばれ、一定の周期で電気の流れる向きが変化する。富士川と糸魚川を境に東日本では1秒間に50回、西日本では60回変化し、これを周波数（ヘルツ）といふ。この周波数を生み出す源泉がタービンの回転。タービンはローター（回転軸）に無数の羽根をつけた、最大直径が3メートルに及ぶ「巨大かざぐるま」のごときのもので、重さ50ト以上に達するが、それが

発電機作りにやりがい

学術的な成果 米学会で発表

1秒間に50〜60回もうなりをたてて回転するのだ。当然速すぎて肉眼では見えない。加えて、モノが回転すれば、必ず軸の振動が発生するが、その振動をミクロン（一ミリの1千分の一）単位に抑えな

制御できないと、タービンが台座から吹っ飛ばすような事故が起きるからだ。見上げるような巨大な装置をつくりなす。これは「能力の覚醒」とも呼ぶべき現象で、私自身も社内ですんなり例を多く見てきた。「エンジニアの地道な努力が私たちの強みの源泉」というのが、創業者の小平浪平以来の一貫して日立を流れる経営哲学である。こうした日々の改善活動に加えて、技術の前線を広げるような大仕掛けのプロジェクトにも取り組んだ。あるとき



中国電力玉島火力発電所の現場で現地スタッフと議論する筆者

こうした研究成果を英語の論文にまとめて、米電気電子学会（IEEE）の発行する有名ジャーナルに発表したことがある。それを受けて、米ニューヨーク州の州都アルバニーを訪ねて講演し、世界各地から集まった技術者と歓談した。1970年ごろのことだ。地味な仕事が多い技術者生活の中で、「自分の仕事の世界から認められない瞬間だった。」（日立製作所相談役）